丹波焼（たんばやき）

出土地：尻並（しなん）遺跡

この焼物は、宮古島市にある尻並（しなん）遺跡から出土した大甕（おおがめ）の底部です。今から約 150 年前の江戸時代末期に、兵庫県の丹波（たんば）という地域で作られました。この地域で作られた焼物は丹波焼と呼ばれていて、その発祥は平安時代末までさかのぼります。江戸時代より前の丹波焼は、赤茶色の地肌をした素焼きの製品が一般的で、黄緑色に発色した自然釉（しぜんゆう）がかかっている場合もありました。ところが江戸時代になると、様々な釉（うわぐすり）や技法で装飾された製品が増えてきます。尻並遺跡出土の大甕の表面には、茶色の釉が全面にかけられていて、内面にはさらに黒い釉がかけられている部分があります。

尻並遺跡は、今から約 120 年前の明治 32 年に建てられた裁判所と、今から約 500 ～ 200 年前の集落から構成される遺跡ですが、この焼物が出土した場所は、裁判所のトイレがあった場所と重なります。また、水平に置かれたような状態で出土したことから、便槽として使われた可能性があります。

沖縄で丹波焼が出土することがめずらしく、また、その焼物がトイレの便槽（べんそう）に使われた可能性があるということが面白いと思い、紹介しました。

※自然釉：窯の中で焼物を焼いている時、焼物の表面にかかった灰がとけて発色した自然の釉。
※便槽：汲み取り式トイレで使われる汚水タンク。

羽方　誠